

「ラム」No. 143

思い出に残る中学校の先生

二〇二四年七月七日

江尻 桂子

その先生と別れて、もう何年もたつのに、ときどき思い出しては懐かしく想う先生がいる。先生がしてくれたことや話してくれたことは、昨日のこのように鮮明に憶えていて、今でも私を精神的なところで支えてくれている。

そうした恩師と呼ぶべき先生は何人かいるが、今回は、私が中学校の時に担任だった宮崎先生の話をしたい。

宮崎先生は、当時二〇代後半くらいの男性の先生で、「熱血教師」と呼ぶのにふさわしい、熱心な先生だった。宮崎先生の理科の授業では、いつも大量の板書が猛スピードで行われた。板書をするほうも大変だったに違いないが、それをノートに書き写す生徒のほうも必死だった。授業の終わりには、生徒は全員、黒板に背を向

けて立たされ、その日に学んだ内容（板書された内容）について、先生から質問された。そして、答えられないと「何、聞いたったんや!」と、すごい剣幕で叱られた。こんな具合だったので、理科の授業は、みんなの前で叱られたくないという一心で、懸命に取り組んだ。

生徒を怖がらせて勉強させるというのは、あまり褒められたやり方ではないが、私自身は、この宮崎先生の理科の授業を通して「授業の内容は、その時その場で理解し、頭に入れる」とことを体得した。

理科の授業がこんな雰囲気であったので、はじめは宮崎先生のことを「怖い先生」「近寄りがたい先生」としか思えなかった。けれども、宮崎先生の教育に対する考えや、それを実現するために努力を惜しまないことが分かるようになるにつれ、「怖いけど、すごい先生」と思うようになった。

なかでも印象に残っているのは、宮崎先生が毎日、学級新聞を出し続けたことである。生徒によって「先公花火（せんこうはなび）」と名付けられたその新聞には、先生から生徒へのメッセージのほか、先生と生徒との間で個別に交わされる「交換ノート」の一部が紹介されていた。

勉強や部活、友人関係などで悩みの尽きない私たちにとって、他の生徒が何を考え、どんなことに悩んでいるのかを知ることができたのは、とてもありがたかった。

当時はワープロなどなく、手書きでの原稿作りであったことを考えると、この新聞を毎日発行するのは大変な作業だったに違いない。宮崎先生自身も、この学級新聞の仕事を誇りに思っていて「努力だけは人に負けへんで」と言っていた。ちなみに、「努力」というのは宮崎先生の好きな言葉で、先生は生徒によくこんな話をした。

「自分が人よりアホと思うんやったら、二倍は努力せよ。人と同じことして勝とうなんて思ったらあかんぞ。」と。

また、定期試験が終わって生徒たちがホッとした日に限って、こういう話をした。

「普通は、テストが終わった日は絶対に誰も勉強せんやろ。」「けどな、自分がアホやと思うんやったら、テストが終わって、みんながだらうとしてるときこそ勉強するんやで。」

今でも私は、宮崎先生のこの言葉を思い出し、その通りだと思う。

気持ちが高まっているときや、締め切りが迫っているときに仕事をするのは、誰にでもできることであり、一職業人としては当たり前のことである。しかし、気持ちが落ち込んでいるときや、何か問題を抱えているとき、また、差し迫った期限がないときに精力的に仕事をすることは（とりわけ、すべには成果がでない研究のような仕事をするとは）とても難しい。しかし、凡人の自分が人並みに仕事をしようとするのなら、たぶんそれをしないといけない。だから、目標に向かって一生懸命に、ではなく、どんなときもフラットな気持ちで淡々とやっていきたい。それが私の理想である。

ところで、中学校の頃の私は、あまり成績がふるわなかった。当時の成績評価は、五段階の相対評価法によるもので、具体的に言つと、各々の教科の最高得点が「5」であり、その「5」を取る人数はクラスの何割と決まっていた。そうした評価制度の中で、私は「4」は取れても「5」がなかなか取れない生徒だった。あるとき、そのことを宮崎先生との交換ノートの中かで打ち明けてみた。そのときの先生の返事は、こういうものだった。

「何いってんねん、おまえやったら、オール5くらいい、とれるやでー」

いま考えれば、それほど深い意味の込められた言葉ではなかったのかもしれない。しかし、当時の私にとっては、わあっと叫んで飛び跳ねたいくらいに、この言葉が嬉しかった。交換ノートに書かれたこの言葉を、私はその後の中学校生活の中で何度も何度も読み返した。

結局のところ、オール5なんて取れたことは一度もなかったものの、「誰かが自分を認めてくれている」という気持ちは、自分というものに全く自信のなかった中学校時代の私を、精神的な部分で大きく支えてくれた。

いま、目の前にいる大学生たちを見ていて、ときどき思うことがある。

学生たちは、それぞれに、人より優れた能力を持ち、大いなる可能性を持っている。彼らが本気になって何かを望み、真剣になって取り組み、実現できることは無数にある。それなのに、そのことに気がついていない学生が少なくない（もちろん気がついて、着々と進めている学生もいる）。

だから、この学生たちを信じ、励まし、支えてくれる存在が必要だと私は思う。

それは親かもしれないし、私たち教員かもしれない。

れない。あるいは学生支援に携わる職員や実習先の指導者かもしれない。この「自分のことを信じ、支えてくれる人」に出会えるかどうか、また、本人が「その人の存在に気づくことができるかどうか」というのは、人生においてとても重要なことである。

これから教師や保育士を目指す学生たちには、そうした人たちとの出会いを大切にしてほしい。また、学生自身が、将来そんなふうに誰かを支える人になってもらいたいと願う。

もちろん私自身も、誰かにとってそうした存在になることができれば、と思っている。

わずかな数であったとしても、その人たちにとって、心に残る師として思い出してもらえるのであれば、教員としてこれほど幸せなことはない。

そうした存在になれるよう、これからも一つ一つ努力を重ねていきたい。

（えじり・けいこ）